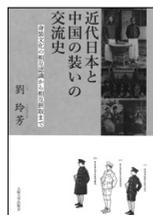


近代東アジアのファッション史 構築への扉

森 理恵

劉玲芳著
近代日本と中国の装いの交流史
—— 身装文化の相互認識から
相互撰取まで



A5判 340頁
大阪大学出版会
[本体 5,400円 + 税]

本書は、著者の劉玲芳さんが大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめられたものである(三一九頁)。構成は三部に分かれており、第一部 身装文化の相互認識、第二部 身装文化の相互撰取(一) 男性の部、第三部 身装文化の相互撰取(二) 女性の部となっている。第一部では一八七〇年代の開港期より一九二〇年代までにおいて、中国人の日本の衣文化に対する認識(第一章)、および日本人の中国の衣文化に対する認識(第二・第三章)について、日記や貿易資料、新聞雑誌記事や書籍にもとづいて論じる。第二部では主に一九二〇年代を中心とした、日本の歌舞伎役者や男性知識人の「支那服」着用(第四章)、来日した中国人男子留学生の断髪・和服・学生服(第五章)、そして日本の学生服がいかにして中山装へと至ったか(第六章)が明らか

かにされる。第三部では女性の衣服に視点を移し、一九〇〇〜二〇年代に来日した中国人女子留学生の衣文化および一九二〇年代に中国で流行した「文明新装」(第七章)、一九一〇〜二〇年代に中国で流行した、日本の束髪に似た「東洋髻」(第八章)、一九二〇年代の日本女性にみられる「支那服」の流行(第九章)を論じる。中国と日本、女性と男性のあいだを軽やかに行き来しながら、明快でわかりやすい構成をとっている。

なお、「身装」というやや聞き慣れない術語であるが、国立民族学博物館の「身装文献データベース」や、同データベースを創始された大丸弘、高橋晴子の両氏が著書などに使われている言葉である。著者は「身装」が「服装・髪型・しぐさ」を指すとする高橋晴子の定義を踏まえ、「身装」という

概念で服装、髪型、身体意識を論じるとする(二頁)。評者は残念ながらこの概念を完全に理解できていないとは言えず、衣文化、服飾、ファッションなどの言葉で代用できると考えるので本稿においてはこれらの言葉を使うことをお許し願う。また、「支那」のつく語について著者は「今日では不適切な呼称であるが(略)歴史的用語として使用した」(vii頁)としているので、本稿もこれに従う。

さて、本書の意義として、著者は終章で「近代東アジア視点から日中両国において、「身装」を媒介として両国の交流を論じ」たことと、「服装の近代化『洋服』という固定的な見方を再検討すべきではないかと提案」できたことを挙げている(二九七頁)。この二点はまさに、評者が日本およびアジアの服飾史を考える上でその重要性を痛感してきたことである。

一点目の「近代東アジア視点」の重要性については近年、その認識が広がっている。ナシヨナリズム・民族主義に規定された一国史・一族史ではなく、人々の交流の実態を見据えたダイナミックな歴史叙述の必要性が多くの分野で再認識されつつある。東アジア研究では古代から現代までの時代においても、現在の国境の枠内で叙述を完結させる無意味さは多くの研究者に共有されているところであろう。とくに

衣文化の接触や交流は人の移動に伴って必ず生じる現象である。ファッション史の分野では、管見でも、韓国では既に二〇一一年に韓国・中国・日本の服飾史を通史として一冊にまとめた、ホン・ナヨン、シン・ヘソン、イ・ウンジン共著『韓中日 東アジア服飾史』(教文社)が出版されている。英語圏では二〇一八年に「東アジア大衆文化」シリーズの一卷としてキョンヒ・ピョン、アイダ・ユン・ウォン共編『近代アジアにおけるファッションとアイデンティティと権力』(Palgrave Macmillan)が発行され、東アジア各地の研究者がファッションの近代化を様々に論じている。学術雑誌の特集としても二〇一七年に *International Journal of Fashion Studies* の四巻二号で「ファッションと東アジア——文化翻訳と東アジア視点」が編まれている。さらに、アジア全体に視野を広げファッションの交流を論じた研究としてピーター・リーの「アジア港湾都市における実験的ハイブリッド・ファッション」(*Port Cities: Multicultural Emporiums of Asia, 1500-1900, Asian Civilizations Museum*, 2016, pp.64-79)を挙げることができる(以上、題名等は拙訳)。評者も及ばずながら「キモノ」表象の民族主義と帝国主義」(福田宏、後藤絵美共編『グローバル関係学5「みえない関係性」をみせる』岩波書店、二〇二〇)でアジアにおける多様なキモノ表象を論じた。本書はこうした国際的な研究潮流に位

置づけられる。本書の出版を契機に、東アジア視点のファッション研究が日本語圏でも進んでいくことが期待できる。

二点目の「服装の近代化＝洋装化」という固定観念の払拭であるが、これもファッション研究者にとっては急務である。例えば江戸時代の人々の多くが、現代の日本で和服と呼ばれているような衣服を着ており、現代日本人の多くの和服を着ていることは確かである。しかし服装の近代化は、洋服が洋服に変わるといような単純なものではない。和服は和服で近代化したし、ヨーロッパの服装も一九世紀から二〇世紀にかけて近代化を遂げた。中国服も同様である。さまざまな地域で近代と呼ばれる時期に、多くの衣文化が接触と交流を繰り返すなかで近代化し、現在に至ったと見るべきなのである。本書はみごとにこのことを証明している。

では次に、著者の論点のうち、評者が強く興味を持ったいくつかの点について述べる。

まず何と言っても面白いのは中山装の源流の解明である(第六章)。日本で「人民服」と呼ばれている、現在でも社会主義国の首脳陣などが身に着けているあの服は如何にして誕生したのか? 中国で孫文の号を冠して「中山装」と呼ばれていることから、従来、孫文が日本滞在中に学生服や軍服を見て考案した、あるいは英国の影響を受けて生まれた、などと漠然と言われてきた。著者はその曖昧な状況に多くの資料を駆使して果敢に切りこみ、丁寧に謎を解き明かしている。その上で読者は、大げさに言えば認識のコペルニクス的転回を迫られる。そもそも、あの詰襟の、いわゆる「学生服」は洋服なのか和服なのか? 「人民服」は洋服なのか中

荒川清秀 著
**日中漢語の
生成と交流・受容**

—漢語語基の意味と造語力の観点から—
日中両国語に共通する漢語がいか
に生じ伝わり共通になったかを造
語における語基の問題から探求。
A5判456p. ■4800円

木村英樹 著
**中国語文法の
意味とかたち**
—「虚」の意味の形態化と
構造化に関する研究—

現代中国語の文法的現象から文
法的意思と形態、文法的意思と構造
の対応のありようを明らかにする。
A5判362p. ■3800円

楊凱栄 著
**中国語学・
日中対照論考**

「了」、スコープと焦点、数量強調、
全称表現、ヴォイス、構文の意味と
構文の相違、語用論をめぐる17編。
A5判376p. ■4600円

日中対照言語学会
**日本語と中国語の
副詞**

副詞に関する研究論文全11編。
A5判240p. ■2800円

日向一雅 編 金孝珍・千葉仁美・朴知恵・
李興淑・金木利憲・太田陽介 訳注
野崎充彦 解説

**韓国漢文
愛情伝奇小説**
周生伝・憑虚子訪花録・崔陟伝・
相思洞記・王郎返魂伝
A5判372p. ■3200円

白帝社 ※価格は税別
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

国服なのか？ 洋服だとか和服だとか中国服だとかいう認識と区別の何と曖昧であることか！（第九章では中国服が「洋服」にカテゴライズされる日本の事例も出てくる）。それにしても一九二五年の孫文の死後、商業主義も手伝って帽子、腕時計、レコード、劇場に至るまで「中山〇〇」と「中山」を名前につけることが流行するなかで「中山装」という名称も定着したというのは目から鱗であった。

「文明新装」や「東洋髻」の論考も楽しい。著者の推理の道筋がわかる文体と構成にも好感が持てる。「中山装」が近代中国男性のシンボルになったのと同様、日本から来た女性教員の束髪を模した「東洋髻」や、伝統的な上衣下裙を質素にした「文明新装」が近代中国女性のシンボルとなったことはとても興味深い。モダニズム（近代化）は勤勉を尊び、単純化と画一化を伴う。ヨーロッパ前近代の装飾過多の服装は、いわゆる「背広」へと近代化を遂げた（アン・ホランダ「性とスーツ——現代衣服が形づくられるまで」中野香織訳、白水社、一九九七年）。それと同じことが「文明新装」「学生服」「中山装」にも言えるのだということが、本書を読むとよくわかる。留学生や教員という国境を越えて移動する集団に着目しているのも本書の特徴である。著者が集めた個人の手紙や手記、新聞雑誌記事、そして写真を通して、彼女／彼らの生々

しい体験が伝わってくる。本書を、留学生たちの体験の歴史、あるいは留学を契機とする文化接触・交流の歴史として読むこともできるだろう。

第四章と第九章では日本における中国への憧れの根強さを知ることができる。歌舞伎役者や男性知識人たちの「支那服」愛好、上流だけでなく一般層にも広まった女性の「支那服」。日清戦争後、中国への蔑視が広まる中、強い憧れが共存しているのは矛盾なのか、あるいは「だからこそ」なのか？ 楽しく読み進めながらもいろいろと考えさせられる本書であるが、ここで少し、問題提起を試みたい。著者は、「相互認識から相互撰取まで」という副題にも示されているとおり、「相互」ということを強調する。そこに対等な者どうしのやりとり、というようなニュアンスが感じられる。もちろん、蔑視のようなことにも言及されてはいるのであるが、前近代における帝国清のアジア支配、近代における日本のアジア侵略といった政治力学には敢えて踏み込まない、というのが著者の立場であるように評者には感じられた。そうすることによって見えてきたものもあるだろうが、やはり少し物足りなく感じた。対等ではない関係はファッションにも反映される。植民地朝鮮と日本とのクロス・ドレッシング（服を取り換えて着ること）についてはイ・ファジンが「キモ

ノ」を着る女性——植民地末期の文化的クロス・ドレッシングの問題」(『大衆叙事研究』27号、二〇一二年)(韓国語、題名は拙訳)でその政治性を詳しく分析している。これは著者というより学界全体の課題と言えるだろうが、今後は韓国朝鮮、琉球、台湾も含めた東アジアのファッションの政治学を見据えていく必要があるだろう。

最後に、論旨と直接は関わらないが、本書において校正の甘さが目立つことを敢えて指摘させていただきたい。日本語が第一言語でない著者が、日中の資料を縦横に駆使し、これだけの著作を仕上げられたことは当に尊敬に値する。助詞の使い方は日本語の幅として許容されると思う。しかし明らかに誤植等も目立つ。これは著者の責というより寧ろ教育組織や出版体制の問題であるだろうが、学術的意義の非常に高い本書にとって誠に惜しいことである。

しかしこれによって本書の価値が減じるわけではない。本書は、日本・中国の文化史やファッションの研究者だけでなく、広くアジアの近代史、外交史、文学、芸術を学ぶ人々にとって必読の書である。一読を強くお勧めする。

(もり・りえ 日本女子大学)

●● パソコン・電子出版関連商品のご案内 ●●

表示価格は東京店店頭における販売価格(本体)です。

◎中国語入力システム

Chinese Writer 11 スタンダード (Win 10 / 8 / 7) 高電社 / 26,000
小学館日中辞典第3版、Unicode版中日大辞典第3版ほか辞典6種搭載。

Chinese Writer 11 学習プレミアム (Win 10 / 8 / 7) 高電社 / 28,000
Chinese Writer 11 スタンダードの内容にさらに検定対策、声調マスターを搭載。

◎日中／中日翻訳

J 北京特許翻訳エディション (Win 10 / 8 / 7) 高電社 / 200,000
「中国特許」に特化した翻訳ソフト。Microsoft Office、一太郎、Web ブラウザ、PDF などに対応。

◎電子辞書

カシオ エクスワード XD-SX7300 (WE / RD) ケース付 カシオ / 特価各45,000
「中日大辞典第3版」「小学館中日／日中辞典第3版」「現代漢語大詞典」「中国語生活図解辞典」
「漢英大詞典第3版」「英漢大詞典」「日中英固有名詞辞典」ほか収録。カラー液晶。白／赤の2色。

◎その他

中国語教学(教育・学習)文法辞典【PDF版】鳥井克之編著 東方書店 / 2,800
大漢和辞典デジタル版 (USB) 大修館書店 / 130,000